



高崎・仁叟寺

選挙区は「野党統一候補」に

比例区は「社民党」の党名を!!

今日の日本の政治はSSSと言われて久しい。いわゆる「説明をしない」「説得をしない」「責任を取らない」の三つのSです。政治の主体者(責任者)が説明をし、説得し、結果責任を負うと言うのが民主主義の大原則であるにもかかわらず、安倍元首相は森友、加計そして「桜を見る会」など、国民の疑惑を受けながらも、国会での質疑では説明責任を果たすことなく、国民に疑惑をあたえたまま辞任をしました。そして今もって在任中の責任を果たすことなく、しかも一般の自民党総裁選挙においては、「キングメーカー」的存在を發揮し、再び政治の表舞台に復帰しようとしています。

さらに吉川元農相収賄事件、河井元法相とその妻、安里元参議院議員、菅原前経産相の選挙違反をはじめとした事件に対しても、再発防止の取り組みは見られず、それどころか、解決済みとして「闇の中」に放置されています。さらに河井陣営に対する1億5000万円という多額の金が渡ったことに対しても明確な説明をしていません。

加えて、森友学園問題を巡る財務省の決裁文書改ざんで、2018年自殺に追い込まれた近畿財務局の元職員赤木俊夫さんの妻、雅子さんが、

鹿児島市内で一般市民を前にして「夫が残した手記には佐川宣寿元理財局長のことがすくく書かれているが謝罪も説明もない」と訴えていました。真相解明のため、国側と係争中の雅子さんが一般市民を前に顔を出して講演したのは初めての」と新聞は報じていました。(朝日新聞9月26日)

今も政府は幕引きを狙う姿勢を崩していない。また麻生財務相は、職を去るにあたっても「再調査は考えていない」と改めて言明しています。まさに「自浄能力」を失った自民党と言っても過言ではありません。これら一連の不肖事件に対し、私たちは、一般の衆議院選挙において結論を出すことを決意しなければならぬと思います。

選挙の事前運動であった自民党総裁劇
小選挙区制度の中での選挙闘争は、複数の少数野党にとっては厳しいものがあり、そこに「野党共闘」の方針が問われます。しかしその力を發揮するには至らない実態があることも事実です。そしてその結果、圧倒的多数の議席を自民党に与えてしまっている事実を考えなければなりません。

さらに安倍政権の長期化は、文字通り、官僚支配という「官邸主導」の体制を堅固なものとなりました。それだけではなく検察への人事にも手を入れようとしたことを忘れてはなりません。

国会や国民に説明することも、責任を取ることもしない政府が、選挙で信任を受け、勝ち続ける限り権力は安泰です。

そして、一般の「自民党総裁劇」があります。まさに、後に控えている衆議院選挙の「事前運動」といつても過言ではありませんでした。そして予定候補者には森友、加計、桜を見る会をはじめとした、これまでの不祥事件に対する説明責任を果たす発言はありませんでした。まさに「忖度政治」の延長であります。

民主主義体制においては、法を犯し、訴追される場合は別として政治的・道義的責任を野党が追及すべきであります。数の力がないとはいえ、全うさせられなかった野党及び、その野党を支えられなかった私たちの責任は重いと云わなければなりません。

民主主義で最後のチェック機能は選挙です

この8年以上に及び「自民党一強政権」が維持されてきました。しかし、忘れてはならないことはその間5度の選挙が実施されたことです。そして、その強い政権をチェックすることができなかった国民の力量の一つに、最大野党と称される「投票不参加者」の実態のあることをかえりみなければなりません。権力の公正な行使を心掛ける「政治指導者」(政党)を得ることができるか、どうか。そのための選挙こそが最後に残る「砦」です。

このことをしっかりと確認し合いたいと思います。



【寄稿】

ゲーム感覚だけの話ではなく

自民党総裁が選挙で決まった、と言っ二ユースが賑々しく伝えられていました。選挙と言っても、自民党の党員でも党友でもない私には選挙権がある筈ありませんので、どの候補がどの様な政策を持っていたとしても、賛否の意思表示はできません。

とは言え、政権政党です。

次期の総理大臣となられるわけですから、関りが無いどころか大いにありというものです。というわけで、そこそこに選挙戦に絡む二ユースは観ていましたが、政治の世界、権力闘争に絡む世界は魑魅魍魎も出るでしょうし、「小説より奇なり」の現実(事実)なども存在しているのでしょうか。

「院政」などと言う古めかしい語彙も飛び交っていました。

法政大学教授の杉田敦氏は次の様に述べられているようですが、私も同感です。

《……アメリカやイギリスなど諸外国では、有権者の多くが政党の党員になっているため、国民の多くが選挙に関わることができます。

一方、日本は限られた人の声しか総裁選には反映されません。

それなのに、どういった政策の人がいいか、といった質問に象徴されるように、国民が次の総理大臣を選んでいくという錯覚を持たされていることを懸念しています」

今回の総裁選の投票資格を持つ党員・党友は約

110万人。国民のわずか1%ほどにすぎない。候補者と同じく、議員の多くが党内のしがらみのなかで票を投じることになる。

「その票が国民の声を反映しているとは言いきれず、人びとが望んでいる形で新しい方向性が出るかが心配です」

……中略……

「総裁選の後は、衆議院議員選挙(総選挙)も控えています。私たち国民もどの政治家が強いといったゲーム感覚の話だけでなく、新しい総裁の政策の身に注目し、政治のあり方を議論していく必要があります」

(「AERA」10月4日号 9/29(水) 配信)

19 都道府県に発令されている緊急事態宣言と8県を対象としたまん延防止等重点措置が今月末の期限で解除されます。「第5波」では、過去のピーク時を大幅に上回った全国の重症者数になりました。医療体制が逼迫し、自宅療養中の方が亡くなるという悲しいことも相次ぎました。

政府の、「高齢者へのワクチン接種が進めば重症者数は抑えられる」という楽観的な見通しから医療体制の拡充が遅れた、とも言われています。新政権には、まずは「コロナ対策をしっかりとやってほしいと考えています。

具体的な施策を示して下さい。



【注】郡山在住のFさんのブログより、ご本人の

了解を頂き、寄稿として掲載をしました。

【一寸ひとこと・気づいたこと、感じたこと】

この時期・宿泊旅行への補助を考える!!

福島県は、県民が県内の旅館やホテルに宿泊する際の費用の一部を補助する「県民割プラス」の予約受け付けを開始した。新型コロナウィルスの感染拡大で落ち込んだ観光関連産業の回復を図るため、県内在住者を対象に60万泊分を用意したという。1泊5000円以上の宿泊に対しては2500~1万円の補助。さらに宿泊者には地元土産物店などで使える2000円分のクーポン券も配布する。その予算額は49億円である。

しかし「一寸待て」と言いたい。

旅行を計画する県民は、コロナの感染状況を考慮し補助のあり、なしは別として出かけるであろう。もちろん補助があればなお「良し」であろう。その実態を見てから補助を必要とするのであれば、予算額も含めて、その時点で決めても良いのではないか。しかし残念ながら「GO・TO列車」は発車した。だがどうしても提起をしておきたい。

今必要なことは、感染状況がやや収まった段階だからこそ、第6の波の対策として、自宅療養を防ぐ医療、救急体制の充実や、コロナ禍の中で職を失った、とりわけひとり親への支援。あるいは県内に60箇所ある「子ども食堂」への支援などが緊急な課題と考える。菅政権の「GO・TOトラベル」の強行の政策の誤りをあらためて喚起したいと思う。



米作の危機を

「食料の危機」とらえたい

米価が下がる中での秋の穫り入れ(稲刈り)は気分が重たいです。「農業」にも「競争原理」が持ち込まれて久しいですが、基本の米価が下がり、いくら交付金で補填(十分ではありませんが)されてもこまります。まるで基本給が下がり「手当」で補填するようなもの。「基本給」は「年金」にも影響すると知ったのは退職真近。「天皇」も田植稲刈りするの、何で農業がこんなに「生活できない」産業にされてしまったのだろうか。「ワフ」がなければ「カツオのわら焼きタタキ」も食べられませんが「水分計」のトラブルでモミの乾燥調製がうまく行かず難儀しています。「出荷」は水分15%に調整しなければならぬのですが16〜17%になっており再乾燥をします。食べるには17%くらいがちょうどいいのになあ。(喜多方・SY)



【ニュースを読んで】

■東電のALPSフィルターの損傷を2年前も隠して交換していたことが明らかとなりました。隠ぺい体質の東電が、汚染水海洋放出を安全に処理して海洋放出する保証はありません。このことも明らかにしなければならぬと考えています。

■間もなく10月です。今日は「敬老の日」「町内会」での恒例行事は「コロナ」で中止です。夏祭り等の町内会行事は全てダメです。総裁選(準決勝)ど

うなりますかねこの後の衆院選野党の踏ん張り期待します。コロナも福島は大分落ち着いた感があります。今月で「まん延防止対策をクリアする」とか。来月のニュースも期待しています。

■今会津は、秋の稲刈りシーズンです。我が家も小規模稲作農家として、奮闘しています。同じ村のO君とコンバイン、乾燥機等を共同利用しながら、経費節減に努めています。しかし、今年の米価は20%のダウン。農家の再生産できる価格を大幅に下回っています。コロナ禍とはいえ、飼料用米を作ったO君は、こんな時代になってしまったと嘆いていました。数十年前、米価闘争で上京して声を張り上げていた頃を思い出しながら、農林漁業の第一次産業が衰退している現状を打破する必要を感じています。人の命を支える農林漁業をないがしろにする一方、人を殺す軍備に多額の税金を投じるこの国。このような国の有り様を変えたいと本気で思います。

■個人的には、やるべきことをやるだけと割り切っていますのでまあまあ、元気にやっています。また、ともかくも今は議論より行動のときですので、県連合の仲間と励まし合って運動を進めています。しかし、大きな流れを変えられる気配は未だ見られません。来年の参議院戦況も含め、国会議員を擁する国政政党としての社民党の存続は大変厳しい状況と言わざるを得ません。それでもやるべきことをやるだけと割り切っています。

■コロナは感染者数が減ってきたのは一安心ですが、依然として重症者や自宅療養者が高止まり

で、緊急事態宣言が解除になれば、また元の木阿弥になるのでは、という不安が消えません。

■今回の「ニュース」で取り上げられた読者からの「声」で、菅首相が辞任したあと、マスコミが自民総裁選の報道一色になり、自民PRの場になってしまっていることへの憂慮がこぼれている「感想」が印象に残りました。目の前の事象に一点集中し、その細部を競うのがマスコミの習性とはいえ、あまりに偏った報道と思います。しかも、政策よりも派閥間の争いや離合集散を面白おかしく取り上げ、暴力団の抗争を語るような興味本位の報道には呆れてしまいます。「マスコミ不信」が語られるようになって久しいのですが、その「不信」を、つかの間の視聴率向上で補えると思っているような姿勢に、救いようのない底の浅さを感じてしまいます。ただ今回は、「コロナ」で追い詰められた人々の不安や怒りが並大抵のものではなく、受け皿さえあれば、風は吹くという期待をもっています。民主党が立憲と国民に割れたままなのは厳しいですが、野党共闘は着実に実りつつあると感じています。共産党候補に投票することにはためらう人がいるのは仕方ありませんが、「野党共闘」を前面に出せば、その障壁も乗り越えられると思います。「非自民」や「非安倍・菅」を旗印にすることが、今は必要ではないでしょうか。社民党の方々も、その点では、野党統一候補を、我がこととして、応援できるのではないのでしょうか。「メディア」という言葉は「媒体」を指すと聞いています。誰かとだれかを結び付けるきっかけや、触媒、産婆役を指すの

ではないかと理解しています。マス・メディアがその役割を果たさず、ある勢力の「伝声管」となっていることは憂うべきことだと思います。ただ、デジタル化やSNSの時代は、一人ひとりが「メディア」になる潜在的可能性を示しているようにも思うのです。「ニュース」も、読者からの声を大きく取り上げるようになってから、一方の「回覧」ではなく、

双方向の「メディア」に変わったように思います。誰かの声が誰かの反応を引き出し、それがさらに別の反応となって好循環が生まれれば、それは立派な「メディア」と言ってもよいでしょう。誰だって、自分の声を誰かに聞いてもらえることが、「自分らしさ」を維持する大きな活力になると思います。「コロナ禍で、様々な出会いや活動が制限されているときだからこそ、そうした「媒体」が必要なのだと思います。社会の出来事を見ていると、個人では何も変えられないという無力感に襲われますが、無力であっても、「無力感」は吹き飛ばせます。一ミリでも現実を動かす気になれば、身近な一ミリは動かすことができます。「ニュース」はそのためにあるのだと感じています。

■さて、後日のお知らせになってしまいました。19日(日)に、県市民連合主催の野党候補討論集会をオンラインで開催いたしました。オンライン開催だったこともあり、金子恵美さん、小熊慎二さん、玄葉光一郎さんの3人の現職がご参加くださったことは大きいと思います。

4- ■昨日まで自分の議会だより「えがお19号」の原稿作成をしていました。2週間ほど前からの週末

には、大分市議会・社会民主クラブの仲間のみなさんと大分市内(大分1区)の中でも、2区選挙区となっている野津原地区や佐賀関地区に吉川はじめ衆議院議員の広報チラシなどを手配りする全戸ローラー的な活動も始めました。我が会派は、私も含めて4名が立憲民主党に移籍、党籍を持たない3名の議員、そして社民党に残った1名の合計8名の会派です。これまでの諸先輩方が積み上げてきた会派の流れもありますのでこの状態を維持していきます。

【註】社民党がんばれOB・Gの会の結成時、会の名称、あるいは方針などは各県の実情に合わせ決定することを確認されました。大分県は「大分勤労者OB・Gの会」として結成されています。

■最近の知人、友人、同士の告別式に参列する事の多いのに心痛める日々です。そんな年になったのか、はたまた何かの要因が起きているのか。頑張るけれども、頑張りすぎず、頑張りたい、そんな気持ちです。

■あと2か月足らずで衆院選の投票を迎えそうです。津久見地区でも「吉川はじめ」の選挙事務所が設置され、10月4日より私たち後援会が、事務所の当番や電話かけに入ります。共に頑張りましょう。

■OB・G会ニュースありがとうございます。いつもながら頑張り学ばされます。コロナ感染もまだまだ油断ができません。ニュースは増す刷りして黨員等に配布します。

■コロナは原因がよくわからないまま新規感染者

が減ってきたようです。「これで政府のこれまでの無為無策が許されていいわけはありませんね。朝のワイドショーで「親ガチャ」という言葉を知りました。カプセルおもちゃのガチャガチャのレバーをひねって出てくるように「親を選べない」その親、例えば親の経済力によって自分(子)の将来が決まってしまうという意味だそうです。

成長期を経験した世代は、「自分次第で頑張ればどうにでもなる」という人が多いのですが、頑張っても将来が見通せない若者が増えているのは否定できない現実のような気がします。間違はなく社会がその方向に動いていると思います。そしてそういう若者に希望を持たせるのが、まさに政治の仕事のほうです。

安倍政治含め自民政権下で実質賃金は減り続け、貧困化が進み格差が拡大してきました。岸田新総理は「新自由主義を見直す」「アベノミクスを軌道修正する」と言っています。さすがに格差と格差の固定化が無視できない状況になっていることを認めざるを得ないのだと思います。問題は抜本的な対策、政策、方向転換が自民政権で可能かどうかという話ですが、多くの人は自民党では変わらないと感じているのではないのでしょうか。世論調査の内閣支持率がパツとしないのもその表れのような気がします。衆院選では「もう騙されない」という有権者の気分が投票行動に見えてくることを願って、野党共闘に期待するばかりです。



